

六段全段の通奏はまだ無理で、とりあえず三段までの演奏になってしまいましたが、そこまでは山本邦山張りの演奏ができたと自己満足に浸っております。70歳を過ぎてからこんなことに挑戦できるのは、頭と身体がまだまだ捨てたもんじゃないということで、趣味を楽しみながら仕事も適当にという有り難い老後に感謝しつつ、6回目の年男の生き甲斐を追求して行こうと考えております。

演奏活動40年を迎えて

空知南部医師会
町立長沼病院

田中利明

地域医療に取り組むため、長沼町に赴任して5年になる田中と申します。医学部入学後よりピオラを習い始め、卒業後は出張先にアマチュア・オケがあれば入団しておりました。今まで、函館市民オーケストラ、札幌市民オーケストラ、釧路交響楽団、小樽管弦楽団、小樽商大室内管弦楽団、ノルト・シンフォニカーに参加しました。小生も還暦を迎えることになり、これまでの活動の中で、特に記憶に残っている2つのエピソードにつきまして書かせていただきます。

一つ目は1980年11月に赴任先の函館で行われた演奏会です。中学時代の恩師の夫が中心となっている市民オーケストラに参加させていただきました。曲目はモーツァルトのフルート協奏曲第2番、交響曲第40番、ホルストの組曲「惑星」とかなり重いプログラムでした。函館は小生の生まれ故郷で、プラスバンドの盛んなところですので、管楽器奏者には事欠かないようでした。しかし、弦楽器はかなりお粗末でした。恩師夫婦ともに音楽教師であったため、方々に声掛けしたようで、助っ人には教え子の東京芸大や桐朋音大などの学生が名を連ねていました。彼らから受けた刺激は強烈でした。何より楽器に対して自由（調性、リズム、強弱、音程も関係なくすぐ弾ける）だったことでした。当たり前といえばそれまでですが、初見とは思えない読譜力で、何回やらせても同じことができる。こちらは、 \sharp や \flat が3つも付けば指が戸惑うわけで、楽譜にポジションや指使いの書き込みをしても、演奏にかなりの困難を感じました。音符を目で追うのに精一杯で強弱を付ける余裕がなく、弾けるところは音が大きくなり、早いパッセージが目立つところは音がずれてしまいます。しかも、弾けるところはリズムや音程も取りやすく、どうでもいいところが多いのです。本番1

週間前から彼らが参加すると、音楽は一変しました。鑑賞可能な演奏になったのです。

もう一つは、1986年の冬に道東の標茶高校体育館で演奏したベートーヴェンの交響曲第9番の第4楽章です。これは、標茶町の町民合唱団「あすなろ」からの呼び掛けで、中学生以上の標茶町民が参加し、独唱もすべて町出身者で行うというものでした。当時、釧路に赴任していましたので、釧路交響楽団として参加しました。合唱と合奏は別々に練習し、演奏会前日にバスで2時間半揺られて標茶に到着し、合同練習を行い、翌日本番というものでした。会場は標茶高校体育館でした。今から見れば、相当つたない演奏だったのではなかったと思われるのですが、独唱、合唱、オケも含め、皆さん一生懸命の大熱演でした。地元標茶のプラスバンドや北大交響楽団からの参加もあり、演奏会終了後の打ち上げは相当に盛り上がり、帰りのバスでは爆睡しておりました。

2000年より札幌フィルハーモニー管弦楽団に入団し、15年が経とうとしております。その間、札幌フィルはもとより、学生サークルの演奏会や当院近くの介護老人保健施設の敬老会にも出演させていただいております。今まで通りの活動が可能な時間も残り少なくなっただけでまいりました。最近は残りの時間に悔いを残すことなく過ごせればと、団員公募の演奏会に積極的に参加しております。昨年は、北海道ベートーヴェン協会主催の交響曲全曲試奏会に参加しました。1日で全9曲を番号順に演奏するというものです。当然、第9番では独唱、合唱も付きました。休憩時間も入れて、10時間掛かりました。肩、顎が痛くなり、第7番あたりでは集中力も落ちてきたせいか、あるパートが落ちてしまいましたが、プロ演奏者でもなかなか経験できないことでした。今年は、江別市制施行60周年記念フェスティバルオケに参加致します。今後も体の続く限り、充実した演奏活動を送れればと思っております。駄文にお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

